
となりの

F

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

となりの

【Nコード】

N5040D

【作者名】

F

【あらすじ】

ああ神様。ごく普通で乙女な私の輝かしい高校生ライフがどうしてこんなことになってしまったのでしょうか！？自称一般女子高校生が、可愛くて人気者の彼の本性を垣間見てしまったお話。

となりのかれはへんたいだ。

こう言うと、いかにも暗くてジメジメした雰囲気を纏っている男を
思い浮かべるかもしれないが、そうではない。

むしろ、彼は美形の類に入る顔を持った人気者である。

佐藤 祐樹という甘美な響きを持つ名前、はにかむ笑顔、透き通つ
たような肌、高校１年生にしては低い１５５cmというミニマムさ、
こつちが押し倒していきりたい衝動に駆られる栗毛の柔らかい髪
質：おっと、ここまで言うとなりが変態扱いされそうなので、自粛す
るとしよう。

話がそれた。

とにかく、見た目でいえば、決して変態のカテゴリーには入らない
だろう人である。
見た目でいえば。

もとはといえば、私と彼は、席が隣合ってるクラスメートという間
柄。

男子とは積極的に関わらない純情な私にとって、話したことなんて
１度もない関係だったのだ。

ただ、日々ちらりとその容姿を垣間見てはその美しさに陶醉したり、
彼の姿を見かけるたびに思わず見入ってしまう行動なんぞはしてい
たが。

そんな輝かしい日々を送っていたある日。というか昨日。

放課後、忘れ物を取りに戻った教室で、彼と女の子が、その、いいかがわしいことをしているような場面と鉢合わせをしてしまい。それを見た瞬間、私の中で何かが音を立てて崩れた気がした。あれはなんだ。

純粹培養で可愛らしいあのサトウユウキなのか!?

信じがたい光景に啞然としてしまい、思考と身体が停止していたのだが、彼はいち早く侵入者に気づいたらしく、接吻をしつつ可愛らしい大きな目を細めて私を見つめた。

その瞳を見た途端我に返り、脱兎の如く逃げ出したのだった。

そして、今に至る。

故に、私の彼に対する評価が「かれはへんたいだ」なのである。

まあ、彼も男性であり、多少女の子ともそーゆーことをしたいお年頃だろう。

ここまでは譲歩して考えても、接吻をしつつ他の女に笑いかけるとはどういうことか。

しかも、いつものようなキラキラの笑顔ではなく、捕食者のごとく、獣のような瞳でニヤリと笑うなんて。

あれはへんたいだ、へんたいを通り越してオオカミさんなんだ。あの場に居合わせなければ、いつものように純真無垢な彼の姿を疑わずに見つめ続けることができたのに…。

そういうわけでとりあえず落ち着こうと、こうして日記を綴っている次第であ「何やってんの?」

…ん？

な、なんだろう…今、後ろから妙に甘ったるい美声が聞こえてきたのは気のせいだろうか。

いや、気のせいに違いな「何やってんの？」

……こここの状況はどうすればいいのですかお母さん！

彼だ。彼に違いはない、というか彼しかない。

ああ、どうしてこんな時に限ってまた人がいないのだろうか。

私は自分のあまりの悲運に嘆きつつ、ギギギと変な音がつきそうなくらい不自然に首を回して後ろを顧みた。
わあ、えがおだまんめんのえがおだ！

「ど、どうしたの、佐藤くん」

「んー、高橋さん、何やってるのかなあと思って」

と、笑いながら話しかけてくる佐藤くん。

あ、はじめて名前を呼んでくれたな。

そんな現実逃避をしていた私に再度彼は問いかけた。

「で、何やってんの」

何ってあなたはへんたいだと書いていたのですよとは正直に言えるわけがなく、「や、今日の授業のノートとるの忘れちゃって…」と苦し紛れに応える。

「へー、そうなんだ。高橋さん、今日上の空だったもんねー」

「そ、そうだったかなっ!？」

「うん、何かぼーとしちゃって」

「あ、あははは…」

「そんなに昨日のこと衝撃的だったの？」

ああ、うんそうなの…と言いかけ はっ!

気が付いた時には、柔和な笑顔が捕食者のそれに変わっていた。おまけに私にどんどん近寄ってきた。やや近いですよ佐藤殿。どうしてそんな嬉しそうなんですか佐藤殿。

ジリジリと近づいてきた彼に反射的に日記を両手で抱えながら後ろへと下がっていく私。

あれ、でも私の席一番前の窓側だからすぐに壁が…と思ったら、もう窓際まで追い詰められていた。

「ななななどどうしたのっかなっ!？」

「うん、さすがにあの時はどうしようかなっと思ったんだけどね」

わ、私は何も見てないし何も言いませんよたとえあなたが捕食者の一面を持っているとしても!!

「…へえ、そんな風に思ってたんだ」

あ、もしかして今の口に出してた？
それに、今声のトーン下がったよね？

私の馬鹿ーと心の中で詰りつつ、もうだめだと思ってぎゅっと目を瞑った瞬間。

睨に暖かい感触が押し付けられた。

……ん？これは、ひよつとすると、もしや！？

と、動揺して動けない私に追い討ちをかけるように、おでこ、ほっぺ、鼻先、そして首筋へと…

「ちょちょ、ちょつつさ、さとつくん！？」

必死の声にも彼は意に介さず、そのまま音を立てて首筋に口付けた。

もう、抵抗もする気がおきず、ボーっとして座り込んでしまった私の顔を見て彼は満足げに笑い、最後に耳元で囁いた。

「変な気起こして、嫌な噂、流さないでね。

あと、今度から見張らせてもらうから、響^{ヒビキ}。」

と、脅迫めいた言葉とさりげなく下の名を呼び捨てにして彼は去っていった。

嵐は去った。

けれど、明日から更なる災難に見舞われそうな気がしてならない。嗚呼、私の輝かしい高校生ライフが！！

もはや、完璧にキヤラ変わっちゃってるよ佐藤君！

とりあえず、腰が抜けてしまったみたいで動けないこの状態。

ため息をつくしかないではないか。

（後書き）

1 作目。

どうして、またこんなお話を作ったのか。

とりあえず、学校・青春・腹黒さをアピールしたかったです。
後日、連載開始予定。

感想書いていただければ幸いです。 励みになります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5040d/>

となりの

2010年10月10日03時10分発行